

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (46)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長浜金久第Ⅱ遺跡

1988年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が新奄美空港建設に伴って昭和62年度に実施した長浜金久遺跡の発掘調査の記録であり、昭和61年3月に発行した同遺跡の報告書に続くものです。

長浜金久遺跡は、昭和57年度から発掘調査を実施してきており、これまで縄文時代の住居跡、弥生時代の人骨、大量の貝製品など地域的特色を示す遺物等が多数発見されました。

本書は、南西諸島の先史・古代史の解明に貴重な手がかりを提供するものとかんがえます。

本書を地域の歴史研究や文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部港湾課・大島支庁、笠利町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和63年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 濱 里 忠 宣

例 言

1. 本報告書は新奄美空港建設にともなう長浜金久第Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿児島県土木部港湾課の依頼を受けて鹿児島県教育委員会が行った。
3. 本書に用いたレベル数値はすべて海拔絶対高である。
4. 遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図、図版とも一致する。
5. 動物骨の同定および所見について鹿児島大学農学部助教授西中川駿氏、貝類の同定および所見について片治中学校教諭行田義三氏に協力を得た。
6. 放射性炭素による年代測定については京都産業大学理学部助教授山田治氏に依頼した。
7. 本書の編集、写真撮影等は井ノ上秀文が行った。

なお、執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章第1節、第2節1、4	井ノ上秀文
第Ⅳ章第2節2—(1)、(2)、(3)	旭 慶男
第Ⅳ章第2節2—(4)	宮田 栄二
第Ⅳ章第2節3	牛ノ浜 修

目 次

序文	第2節 出土遺物	8
例言	1. 土器	8
第I章 調査の経過	2. 石器	15
第1節 調査に至るまでの経過	3. 貝製品	20
第2節 調査の組織	4. 骨角器	21
第II章 遺跡の位置及び環境	長浜金久第II遺跡出土貝類	26
第III章 層序	長浜金久第II遺跡出土の自然遺物	30
第IV章 発掘調査	液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定結果報告書	32
第1節 調査の概要		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	第4表 螺蓋製貝斧計測表	20
第2表 石器一覧表	第5表 貝輪計測表	22
第3表 貝刃計測表		

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	第10表 石器、貝製品等出土状況	16
第2図 遺跡付近の地形図	第11図 石器 (1)	17
第3図 土層断面図	第12図 石器 (2)	18
第4図 グリッド配置図	第13図 石器 (3)	19
第5図 遺物出土状況	第14図 螺蓋製貝斧模式図	20
第6図 土器出土状況	第15図 貝製品 (1)	23
第7図 土器 (1)	第16図 貝製品 (2)	24
第8図 土器 (2)	第17図 貝製品 (3)、骨角器	25
第9図 土器 (3)		

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景、調査風景、土層	図版3 出土遺物 (土器、石器)	35
図版2 遺物出土状況、出土遺物 (土器)	図版4 出土遺物 (貝製品、骨角器)	36

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は大島郡笠利町万屋・和野地区に新奄美空港の建設を計画した。この建設用地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することから、県土木部港湾課と県教育庁文化課はその取り扱いについて協議を行った。その結果、土木部からの依頼により、県教育委員会は埋蔵文化財の発掘調査を受託し、実施することとなった。発掘調査は昭和57年から昭和61年にかけて実施して、長浜金久第Ⅰ～第Ⅴ遺跡、泉川遺跡等の記録保存を行った。

長浜金久第Ⅱ遺跡については、昭和57年に試掘調査を行い、昭和58年に本調査を実施した。その後、協議の結果、遺跡の一部を空港の緑地帯として現状保存する計画であった。

しかし、保存地区の一部が駐車場への進入路にあたるため、文化課と港湾課は協議を重ねた結果、進入路及びその工事で破壊される部分について発掘調査を実施して、記録保存を行うこととなった。

発掘調査は昭和62年4月20日から昭和62年5月16日まで実施した。その後、遺物整理作業、報告書作成作業を行った。

第 2 節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	濱 里 忠 直
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	吉 井 浩 一
		課 長 補 佐	川 畑 栄 造
		主 幹	森 田 齊
調査企画		主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	立 園 多 賀 生
調査担当者		主 事	井ノ上 秀 文
事務担当者		企画助成係長	濱 松 巖
		主 査	京 田 秀 允
		主 事	川 畑 由 紀 子

出土遺物については、県文化財保護審議会委員河口貞徳氏の指導を受けた。

発掘調査中は笠利町教育委員会教育課及び歴史民俗資料館の協力を得た。

また、文化財研究員旭慶男、同主査牛ノ浜修、同主事宮田栄二の各職員も、一時調査に携わった。

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

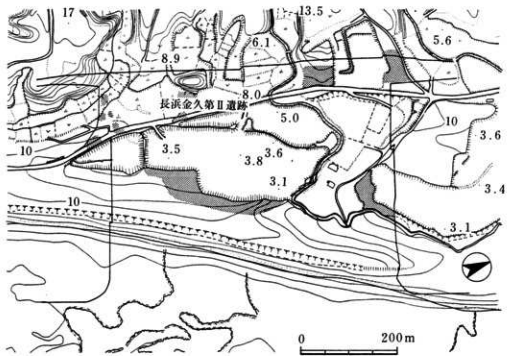
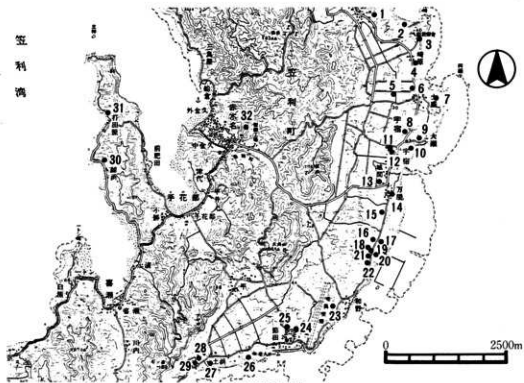
長浜金久第Ⅱ遺跡は大島郡笠利町和野長浜金久に所在する。

遺跡の所在する笠利町は奄美大島の北東端部に位置しており、南北約15km、東西約8kmの半島である。龍郷町と接する南西部のほかに海に囲まれており、東海岸は太平洋に西海岸は東シナ海に面している。笠利町は奄美大島の中でも南部に比べて平野部の多い地域であるが、中央部には北から高崎山、高岳、淀山、大刈山等150m～180mの山々が連なっている。これらの山々により半島は東海岸と西海岸に分けられる。東側は隆起して緩やかな丘陵状の台地となっているが、西側は逆に沈降して溺れ谷の地貌を呈している。東海岸では海岸線にそって砂丘が発達しており、この砂丘は洪積台地の裾部に形成された旧砂丘と現在の海岸線を形成する新砂丘とに分けられている。

長浜金久第Ⅱ遺跡は笠利町東岸の太平洋に面した砂丘上に立地している。洪積物の台地の裾部に形成された旧砂丘で、遺跡の標高は約8mあり、遺跡の西側を小川が和野の集落へ南流している。近くに下山田遺跡、泉川遺跡、長浜金久Ⅰ、長浜金久Ⅲ～Ⅴ遺跡等がある。

第1表 周辺の遺跡

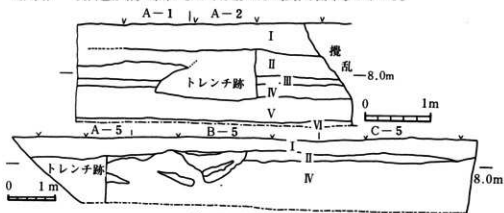
No.	遺跡名	所在地	時期	No.	遺跡名	所在地	時期
1	コロビ	須野字コロビ		17	泉川	万屋字長浜	奈～平
2	あやまる第2貝塚	須野字大道	弥	18	長浜金久Ⅱ	和野字長浜	縄
3	あやまる第1貝塚	須野字崎原		19	長浜金久Ⅴ	和野字長浜	弥
4	崎原	須野字崎原		20	長浜金久Ⅰ	和野字長浜	奈、平
5	マツノト	宇宿字松ノト		21	長浜金久Ⅲ	和野字長浜	弥～古
6	喜子川	宇宿喜子川	縄	22	長浜金久Ⅳ	和野字長浜	弥
7	土盛	宇宿字土盛		23	ナビロ川	和野字ナビロ川	
8	宇宿貝塚	宇宿字大道	縄、弥	24	節田ヨフ井	節田ヨフ井	
9	宇宿港	宇宿字港	弥	25	節田大漆	節田字大漆	
10	前金久	宇宿字前金久	歴	26	立神	節田字立神	
11	宇宿高又	宇宿字高又	縄	27	土浜	土浜	
12	宇宿小学校	宇宿	縄	28	ヤーヤ洞穴	土浜字ヤーヤ	縄
13	城	万屋字城	縄～	29	土浜ヤーヤ	土浜字ヤーヤ	縄
14	万屋	万屋		30	鯨浜	喜瀬字鯨浜	
15	下山田	万屋字下山田	縄	31	サウチ	喜瀬字サウチ	弥
16	ケジ(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)	万屋字ケジ	縄	32	赤木名城	里字川道ほか	歴



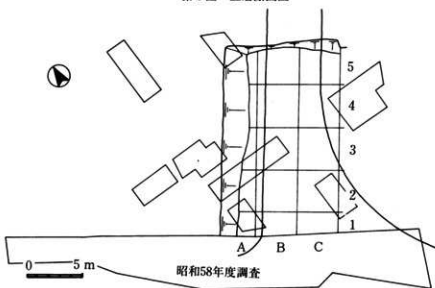
第三章 層 序

層序は基本的には昭和57、58年の調査と同様であるが、今回は6層に分けた。

- 第Ⅰ層 砂、赤土及び旧表土の混ざった盛り土。
- 第Ⅱ層 灰褐色を呈した砂層で旧表土である。
- 第Ⅲ層 黄白色砂層。
- 第Ⅳ層 白色砂層。
- 第Ⅴ層 灰褐色砂層。多量の灰が混ざっており、場所によってはガチガチに固まっている部分がある。遺物包含層であり、縄文後期相当の土器とともに石器、貝製品等が多量の貝類とともに包含されている。
- 第Ⅵ層 黄白色砂層。場所によっては上の灰の影響で固くなっている。



第3図 土層断面図



第4図 グリッド配置図

第IV章 発掘調査

第1節 調査の概要

今回発掘調査を実施した地区は、昭和57年に確認調査、昭和58年に本調査を実施した区域の北東部分である。前回の調査地区に隣接する部分は、ある程度の量の遺物が出土することが昭和57年の確認調査により考えられていた。

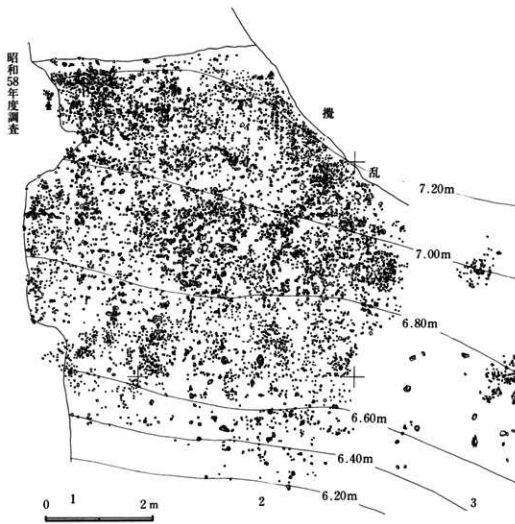
前回の発掘調査にあわせて4×4mの大きさのグリッドを設定し、北西から南東へA、B、Cとし、南西から北西へ1、2………5として、調査を行った。

その結果、A、B-1、2区とC-1、2区及びC-3区の一部に特に遺物が集中して出土した。遺構等は確認されなかった。遺物は数多くの土器片とともに石器、貝製品等が多量の貝類に混ざった出土した。

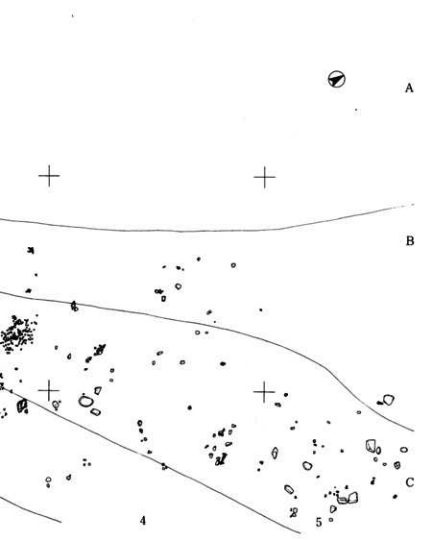
第2節 出土遺物

1. 土器 (第7図～第9図)

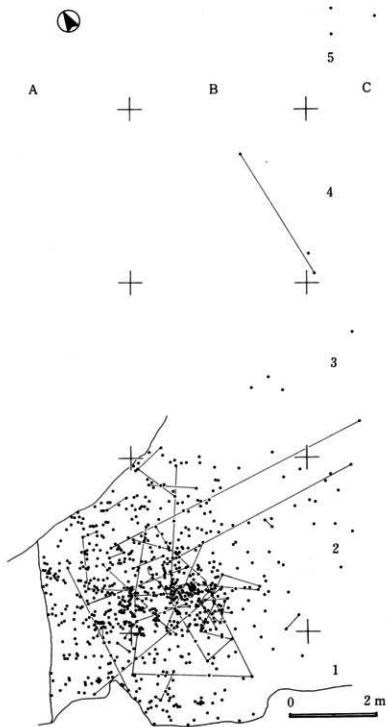
1は肥厚する口縁部に先の突った施文具で押引文を施す。面縄束洞式に比定される。2、3はヘラ状のものによる沈線の間に押引文に近い刺突文を施文するものである。4、6は沈線のあいだに押引文に近い刺突文とカギ状の折れ線文を交互に施文している。5は口縁部の刺突文の下に鋸歯文を重ね組み合わせた文様を施文する。7～23はそのほとんどが山形の口縁部で8、14は上面観が方形に近いものである。文様は横位の沈線の間に縦長の刺突文とヘラ状の施文具によるカギ状の折れ線文を交互に施し、この文様の下にヘラ状のものによる鋸歯文を重ね組み合わせる。24～27は刺突文とカギ状の折れ線文を区別する沈線文がみられないものである。28～31、34は刺突文が縦位に施文される部分がみられるものである。30には焼成前のものとみられる径約1.5mmの円形の穿孔がみられる。32、33、35～38は沈線の間に縦長の刺突文のみを施文するもので、下位は鋸歯文を重ね組み合わせた文様である。39、40は横位の沈線の間に刺突文を施文する部分と無文のままの部分とがあるものである。これらの土器は嘉徳1式に比定される。出土した土器の大多数がこの土器である。44、45は横位の沈線の間に同じ施文具で沈線を施し、下位も同様の施文具で鋸歯文を重ねて施すが、施文がやや雑である。46～48は口縁の肥厚部分の上位と下位に連点文を施し、その間に斜位の沈線を交互に重ね施文するものである。49は斜位の短沈線文をもつものである。50は肥厚する口縁部に横位と縦位の連点文を施文する。51～56はヘラ状の鋭い道具で細沈線文を施文するものである。57は口縁部に小さい隆起をもち、胴部がややふくらむ器形で、文様はヘラ状の施文具で沈線文を施す。胎土が他の土器に比べて砂粒の混入が少なく、焼成も堅致である。58、59は無文土器である。60はその器形、用途共にはっきりしない土器である。61～70は底部である。出土した土器の胎土には多少の差はあるがそのほとんどに金雲母を含んでいる。



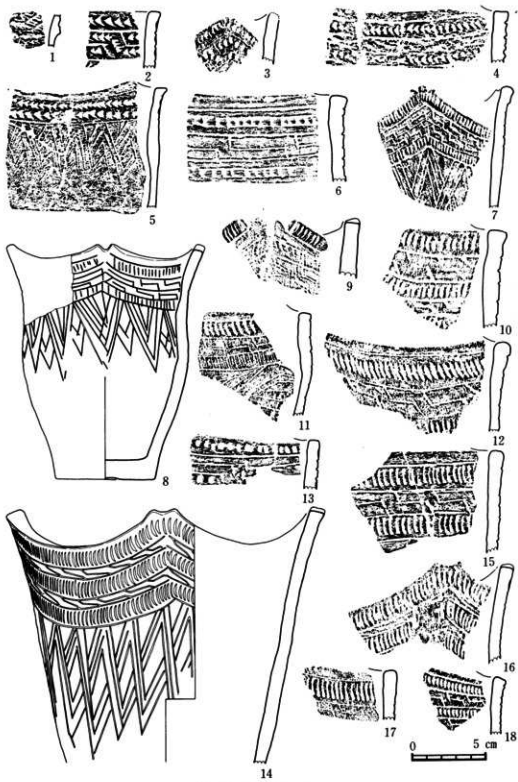
第5図 遺物出土



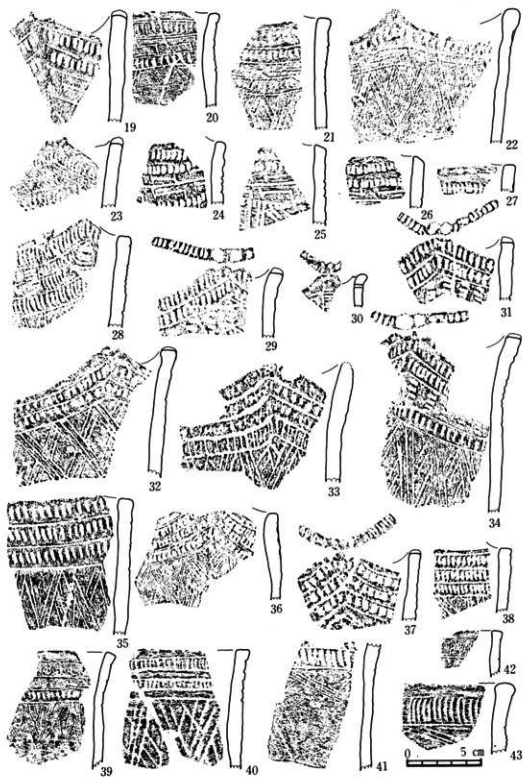
況



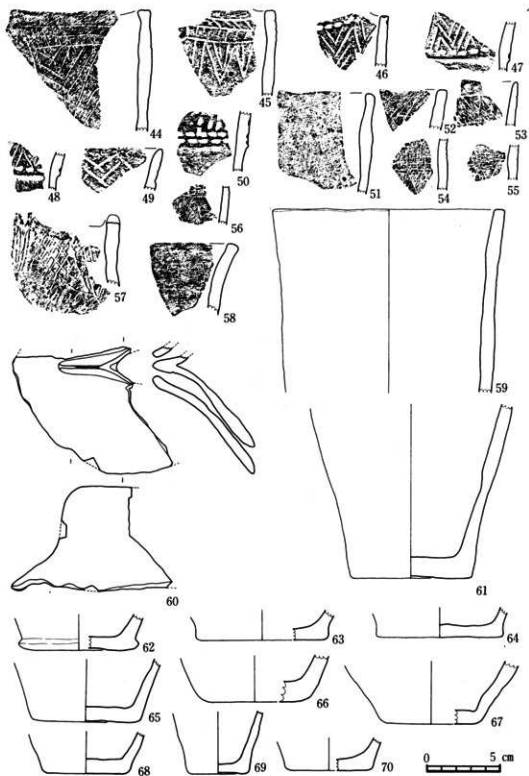
第6圖 土器出土状況



第7圖 土器 (1)



第8圖 土器 (2)



第9圖 土器 (3)

2. 石器 (第11図～第13図)

石器は磨製石斧・磨石・敲石・砥石の他、有溝砥石が21点出土した。

(1) 磨製石斧 (第11図71)

刃部を欠損し、側面の片側に敲打痕を残すが、表裏面ともによく研磨されている。輝緑岩製である。この他、磨製石斧の剥片と思われる小剥片が2点出土している。

(2) 磨石及び敲石 (第11図72～77)

72・73は円礫を利用した磨石であるが、周円部・平坦部に敲打痕がみられる。いずれも一部を欠損している。74～76は自然円礫・角礫を用いた敲石で、敲打による使用痕が明瞭にみられる。中でも75は両面ともに凹みが深い。77は掌大のわりあいに扁平な半円状の自然円礫の片面をすって平坦面を作り出したもので、周縁に敲打痕が明瞭に残っている。磨石・敲石と同様な用途が考えられる。

(3) 砥石 (第11図78・79)

いずれも粒の粗い砂岩製の砥石である。78の片面には、使用による縦方向の擦痕及び段がみられる。79は小破片であるが片面のみ使用されている。

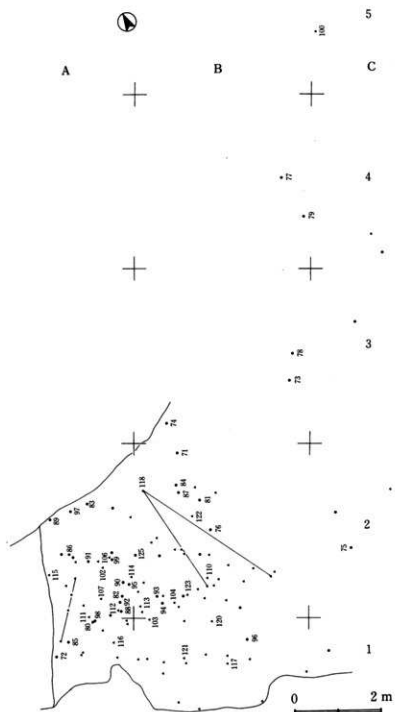
(4) 有溝砥石 (第12図～第13図)

砂岩の扁平小礫を使用し、断面U字状ないし半円形の溝状の使用痕跡を有する一群を有溝砥石とし、普通の平坦面を使用したものとは別に扱った。今回の調査では計21個が検出された。

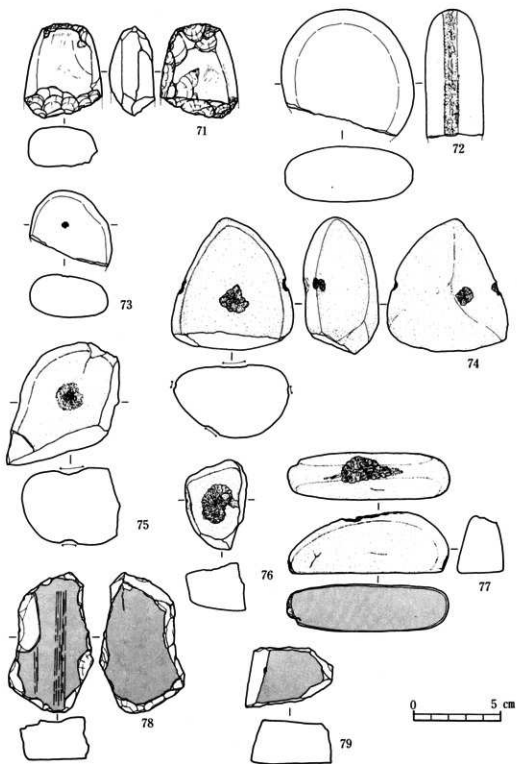
80は扁平で楕円形の自然礫を利用したもので、片面に2条、裏面には浅い1条の溝がみられる。82も自然礫を利用したもので、表面の他にも側縁に二ヶ所の使用されたと思われる部分がわずかに認められる。81・83・84は扁平礫の片面のみ溝があり、85～93は両面に溝がみられるものである。溝は多くなるとお互いに直交するように使用されているものが多い。このなかで89は溝以外の平坦面にも使用痕と思われる擦痕が明瞭に認められる。90も同様に平坦面に擦痕が観察される。また90は溝が深くなるほど使用されており、研磨される対象物の幅が5mm未満であることが推定される。94～98は厚みのある礫が使用され、溝は各面にみられるものである。また、各面の溝は複数であり、使用できる部分はほとんど利用されている。99は他と異なり、軽石製で溝が3条みられる。

これらの有溝砥石の特徴は次のようになる。砂岩の小自然礫が使用され、平坦面の中央部が利用される。使用による溝の長さは約2～5cmであり、最も多いのが3～4cm前後である。溝の幅は4～5mmであり、断面はU字状ないし半円形となる。また溝の底面長軸の断面を全て測定した結果、ほとんど直線的に水平であり、中央部が浅く両端が深く弧状に丸みを有するものはわずかに3例(87・91・92の各々の1条の溝)であった。逆に溝の中心が両端より深くなるものは認められなかった。

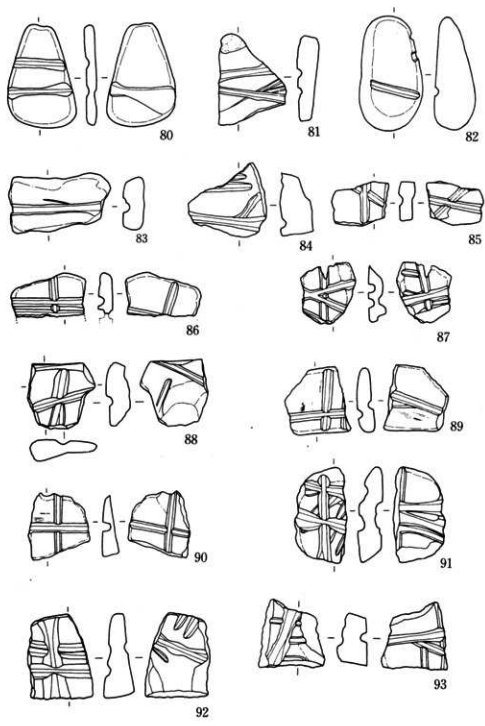
有溝砥石はこれらの特徴より、細長いもので幅が5mm以内のものを研磨する目的のものと思われる。また溝以外の平坦部も使用しており、本石器の使用対象については詳細な分析が必要と考える。



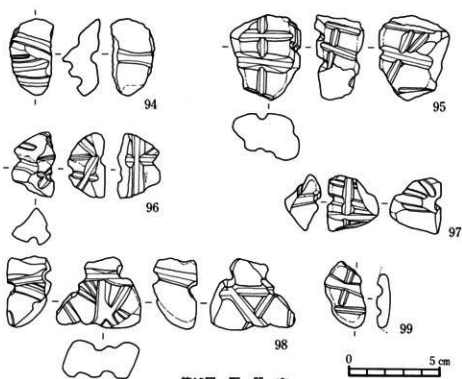
第10図 石器、貝製品等出土状況



第11圖 石器 (1)



第12圖 石器 (2)



第13圖 石器 (3)

第2表 石器一覽表

採回番号	遺物番号	器種	出土区	層	重量	石材	備考	採回番号	遺物番号	器種	出土区	層	重量	石材	備考
11	71	磨製石斧	C-5	V	255	輝綠岩	刃部欠損	12	86	有溝磁石	A-2	V	10.25	砂岩	
11	72	磨石	A-1	V	900	ヒソ岩	敲石	12	87	有溝磁石	B-2	V	7.90	砂岩	
11	73	磨石	B-3	V	180	砂岩	敲石	12	88	有溝磁石	A-2	V	17.05	砂岩	
11	74	敲石	C-2	V	825	砂岩		12	89	有溝磁石	A-2	V	15.45	砂岩	
11	75	敲石	C-2	V	865	砂岩		12	90	有溝磁石	A-2	V	12.0	砂岩	
11	76	敲石	B-4	V	170	砂岩		12	91	有溝磁石	A-1	V	17.50	砂岩	
11	77	磨石・敲石	B-4	V	385	砂岩		12	92	有溝磁石	A-2	V	28.95	砂岩	
11	78	磁石	B-3	V	360	砂岩		12	93	有溝磁石	B-2	V	21.6	砂岩	
11	79	磁石	B-2	V	185	砂岩		13	94	有溝磁石	B-2	V	17.5	砂岩	
12	80	有溝磁石	A-1	V	19.05	砂岩		13	95	有溝磁石	A-2	V	47.10	砂岩	
12	81	有溝磁石	B-2	V	20.75	砂岩		13	96	有溝磁石	B-1	V	12.05	砂岩	
12	82	有溝磁石	A-2	V	59.05	砂岩		13	97	有溝磁石	A-2	V	12.95	砂岩	
12	83	有溝磁石	A-2	V	30.40	砂岩		13	98	有溝磁石	A-1	V	33.25	砂岩	
12	84	有溝磁石	B-2	V	27.95	砂岩		13	99	有溝磁石	A-2	V	1.10	砂岩	
12	85	有溝磁石	A-1	V	7.70	砂岩				有溝磁石	A-3	V	16	砂岩	

3. 貝製品 (第15図～第17図)

本遺跡から出土した貝製品はその大半が遺物集中箇所からであり、その所属時期は縄文時代後期嘉徳Ⅰ式期に比定される。貝製品には貝刃、螺蓋製貝斧、スイジガイ製利器、貝製匙状製品、貝輪がある。

(1) 貝刃

二枚貝の腹縁を押圧剥離によって刃をつけたもので、5点出土している。貝種はいずれもマングローブシジミである。刃部加工を腹縁外側に施し、腹縁部全体に刃部を形成しているものが主であるが、100は腹縁外側全体を研磨し、そのうえから押圧剥離によって刃部を形成している。刃部の範囲は前背縁から腹縁中央までである。

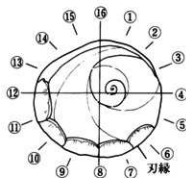
貝刃の貝種は、マングローブシジミ、チョウセンハマグリ、リュウキュウマソオガイ、サメザラガイ等が報告されている。マングローブシジミの貝刃を出土した遺跡は犬田布貝塚¹⁾が知られている。

第3表 貝刃計測表

遺物番号	区・層	貝種	L・R	殻長	殻高	重量	備考
100	C-5・V	マングローブシジミ	L	67mm	61mm	28.55g	殻長部を除き、研磨を施し剥離を加える
101	*	*	L	55	54	16.10	打割は深く明瞭である
102	A-1・V	*	R	78	73	10.30	打割は浅い
103	B-1・V	*	R	49	43	46.50	*
	B-2・V	*	L	51	44	10.90	打割は深く明瞭である

(2) 螺蓋製貝斧

夜光貝の蓋を利用し、蓋の薄い縁部を数回の打撃によって附刃したものである。今回は8点出土した。刃部の分布範囲をみるため第14図のように、記号で示すことにし、第4表にあらわした。附刃は③～⑩に及び、とくに④～⑩に附刃率が高い。106は敲打と研磨によって刃部の平坦面を形成している。同様のものが宇宿貝塚²⁾でも出土している。



第14図 螺蓋製貝斧模式図

第4表 螺蓋製貝斧計測表

遺物番号	区・層	縦mm	横mm	重量	附刃の範囲	加工状況の及び備考
104	B-2 V	68	73	187	2~13	刃はやや鈍角で、外面も剥離する
105	C-2 V	62	69	107	3~6 9~13	刃は鋭角で2ヶ所に附刃している
106	A-2 V	71	76	182	2~14	刃はやや鈍角で、敲打痕、研磨痕がみられる
107	A-1 V	66	77	145	1~12	刃は鋭角である
	B-1 V	72	80	166	5~12	刃は鋭角である
	A-1 V	78	74	139	(6)~9	刃縁の中央は欠損している
	B-1 V			43	?	破損している為、刃の全形は不明
	C-4 V	72	60	105	4~12	一部破損している為、刃の全形は不明

(3) スイジガイ製利器

108は、スイジガイ製利器である。第2管状突起の先端部を研磨して錐状に尖らしたものである。横方向の研磨により刃縁がやや丸みを呈している。現存最大長66mm、最大幅7mm、重量4.5gである。

(4) 貝匙状製品

109, 110は、夜光貝製の貝匙状製品である。109は把手部である。研磨が入念で、内・外面の表層、結節を全て磨り落とし真珠層を露したもので、頭部の中央はV字状にえぐられ、中央に穿孔が施され、それを中心に左右対象に「チョウが羽を広げた」形状に加工している。

110も研磨が入念になされ、表層・結節を全て磨り落とし真珠層を露したもので完形品である。把手部の上に4mm前後の穿孔を施し、右方向に弯曲している。最大長14.6cm、最大幅6.1cm、重量26.7gである。研磨痕が周縁、外面に非常に顕著であり、また真珠層が輝き美形である。

111も丁寧に加工調整されたもので、形状よりヒシヤク状貝容器である。厚さは5～7mmで重量は36gである。

(5) 貝輪

貝輪は今回62点出土した。前回114点出土しているので総数176点である。今回の62点の内訳はオオツツノハ製61点である。すべて破損品で5組が接合した。オオツツノハを素材としたものは、殻頂部を除去して環状に外縁部を有するもので、研磨により放射肋の凸凹を取りさり、外面も研磨調整が顕著にみられる。また内・外縁とも研磨調整が行われている。

112は、当初貝輪の範疇で捉えたが、加工状態から他の用途も考えられる。ソデガイ科の貝種を利用し、現存最大長5.2cm、幅1.0cm、重量1.8gである。

引用文献

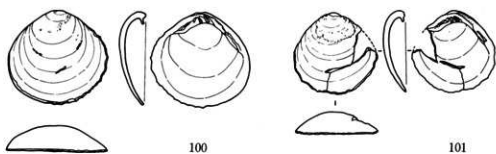
- 1) 伊仙町教育委員会「犬田布貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘報告書2 1984
- 2) 笠利町教育委員会「宇宙貝塚」笠利町文化財調査報告書 1979

4. 骨角器 (第17図)

125は猪の牙製で径1.7mmの穿孔がみられる。穿孔部分、先端部ともに欠損している。薄く割れているがこれは、牙の内側の部分に擦痕らしきものが観察されることから、もともと扁平に割ったものを素材としたことが考えられる。現存最大長5.75cm、最大幅0.8cm、重量gである。126も猪の牙を素材としたもので、先端をすどく加工しているものである。最大長5.4cm、最大幅1.55cm、重量6.0gである。

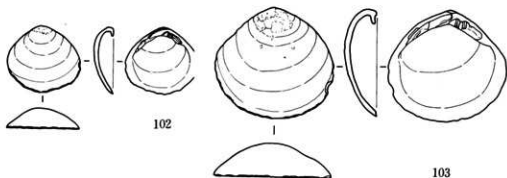
第5表 貝輪計測表

遺物番号	区・層	貝 種	法 量			加 工 状 況
			最大長×最大幅mm	内径mm	重量 g	
112		ソテガイ科?				全面丁寧な研磨あり
113	B-2・V	オオツタノハ	—	—	2.15	穿孔3ヶ所、縁辺部研磨痕
114	A-2・V	*	—×48	—×36	3.10	外面・外縁・内縁研磨
115	A-2・V	*	—×50	—×33	10.45	*
116	A-1・V	*	—	—	8.4	* 特に外面は丁寧な研磨
117	A-1・V	*	—×72	—×52	8.65	放射筋を取り除き、日本来の赤みの色が顕著
118	B-2・V	*	90×59	64×47	10.30	全面丁寧な研磨
119	B-2・V	*	86×56	67×40	7.65	研磨痕があるが放射筋の凸凹が顕著
120	A-1・V	*	—×61	—×41	8.7	劇回の貝輪と接合、丁寧な研磨
121	B-1・V	*	74×57	50×33	7.85	放射筋を研磨にてとり除く
122	B-1・V	*	80×62	62×40	10.50	外面・内外縁研磨
123	B-2・V	*	84×—	85×—	8.75	*
124	B-1・V	*	70×—	51×—	7.50	全面丁寧な研磨
	B-2・V	*	—×69	—×49	6.6	*
	B-2・V	*	—	—	6.59	*
	B-2・V	*	—	—	3.57	放射筋が顕著である
	A-2・V	*	—×65	—×50	4.02	外縁特に研磨が丁寧
	B-2・V	*	—	—	1.47	外縁・外面特に丁寧な研磨
	B-2・V	*	—	—	3.5	全体丁寧な研磨
	A-1・V	*	—	—	2.05	火を受け灰色に着色している
	B-2・V	*	—	—	3.45	外面・内外縁に研磨
	B-2・V	*	—×59	—×50	4.30	全体を丁寧に研磨、厚みのある
	B-2・V	*	—	—	3.55	全体を丁寧に研磨
	B-1・V	*	—	—	2.6	*
	A-2・V	*	—	—	2.0	*
	A-2・V	*	—	—	1.80	* 薄手である
	B-2・V	*	—	—	3.10	* 研磨痕が顕著
	B-2・V	*	—	—	3.15	*
	B-1・V	*	—	—	4.75	外面・内外縁研磨
	B-2・V	*	—	—	3.75	全体を丁寧に研磨、厚みのある
	A-1・V	*	—	—	4.60	* 放射筋顕著
	B-2・V	*	—	—	4.05	*
	B-1・V	*	—	—	3.25	*
	B-1・V	*	—	—	1.85	* 薄手
	B-2・V	*	—	—	1.75	*
	B-1・V	*	—	—	4.70	*
	B-2・V	*	—	—	4.75	* 厚手
	B-2・V	*	—	—	2.80	外面・内外縁研磨、薄手
	A-2・V	*	—	—	4.85	全体を丁寧に研磨、厚手
	B-1・V	*	—×58	—×14	4.80	*
	B-2・V	*	—	—	3.80	* 放射筋顕著
	B-2・V	*	—	—	2.50	*
	A-2・V	*	—	—	5.60	*
	B-2・V	*	—	—	2.80	*
	B-2・V	*	—	—	3.20	*
	B-2・V	*	—	—	3.30	*
	A-1・V	*	—	—	5.75	*
	A-1・V	*	—	—	2.9	* 放射筋とり除く



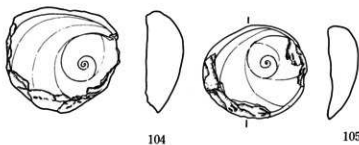
100

101



102

103

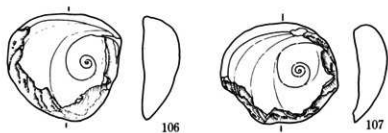


104

105



108

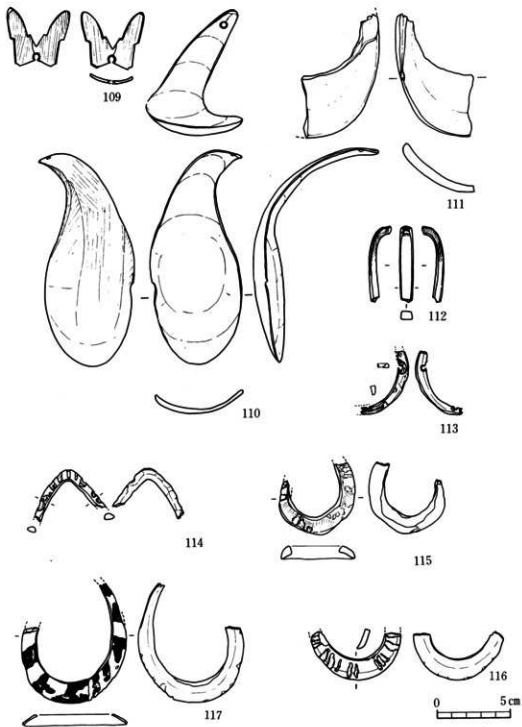


106

107



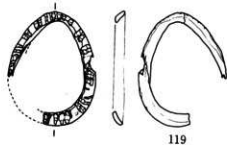
第15圖 貝製品 (1)



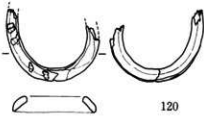
第16图 貝製品 (2)



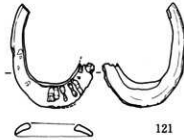
118



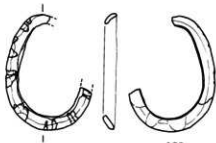
119



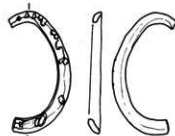
120



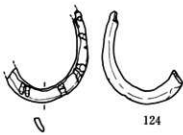
121



122



123



124



125



126



第17图 貝製品(3)、骨角器

長浜金久第Ⅱ遺跡出土貝類

行 田 義 三 (片泊中教諭)

1. 長浜金久第Ⅱ遺跡出土の貝類は次の通りである。

128種	海 産	巻 貝……………95
		頭足類…………… 1
		二枚貝……………27
	陸 産…………… 3	
	淡水産	巻 貝…………… 1
	二枚貝…………… 1	

2. 出土数の多い貝は、マガキガイ・アマオブネ・イソハマグリ等であり、マガキガイは付近のラグーン(礁湖)に多産し肉も美味である。アマオブネは潮間帯(海浜付近)の岩場に多産し針で肉抜きも容易である。イソハマグリは低潮線付近の砂中に生息し採取には苦勞しない。

3. これまでの調査で付近の遺跡(金久Ⅰ・金久Ⅱ・ケジ・泉川)から出土していない貝は、ヨメガカサ・イシダタミ・ベニシリダカ・ヒメイシダタミアマオブネ・コシタカマガイ・ヒロクチダカラ・ヘソアキトミガイ・ウチヤマトマツバキ・アツソデ・スクミウズラ・フトウネナガニシ・アツムシロ・ヒメヨフバイ・イモフデ・カバミナシ・アサガオガイ・コブシメ・カリガネエガイ・ヒメツキガイ・リュウキュウアサリ・サメザラモドキ等である。アツソデ以外は写真に撮り収録した。なお、写真の番号は一覧表の番号と一致している。

4. 今回の調査でタツナミガイ(立浪貝)の殻を27個も確認した。前回、泉川遺跡からも出土しているが今回はその数の多さに注目した。タツナミガイはアメフラシ科の貝で、触れるとアメフラシ同様に紫汁を出す。砂上で採れるものは、肉の中に細砂があり嚼むとがさがさして食用に不向きであるが、岩礁上を這っているものは上質の肉で独特の味がありアメフラシよりも美味である。殻は石灰質で扇子状、退化して内蔵されているので外から直接見ることはできない。

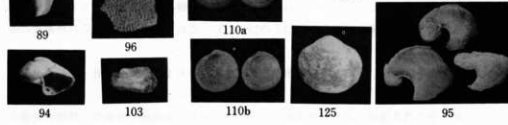
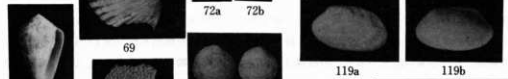
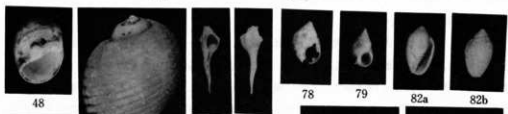
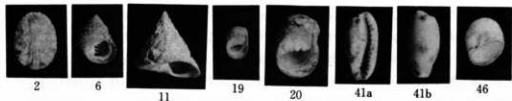
長浜金久第Ⅱ遺跡出土貝類一覧表(表中の金久Ⅱは1985年3月の報告書による)

番 号	和 名 (又は科名)	金久 Ⅰ	金久 Ⅱ	ケ ジ	泉 川	番 号	和 名 (又は科名)	金久 Ⅰ	金久 Ⅱ	ケ ジ	泉 川
	巻 貝 (海産)						※ツツノハ科				
	※ユキノカサ科					2	ヨメガカサ				
1	リュウキュウノアシ		○			3	オオベッコウガサ	○	○	○	○

番 号	和 名 (又は科名)	金 久 Ⅰ	金 久 Ⅱ	ケ ジ	泉 川	番 号	和 名 (又は科名)	金 久 Ⅰ	金 久 Ⅱ	ケ ジ	泉 川
	※ミミガイ科						※タカラガイ科				
4	イボアナゴ	○	○	○	○	37	ハナビラダカラ	○	○	○	○
5	フクトコブシ		○	○	○	38	キイロダカラ				○
	※ニシキウズ科					39	ホシキメタ		○	○	
6	イシダタミ					40	ヒメホシダカラ				○
7	オキナワイシダタミ	○		○	○	41	ヒロクチダカラ				
8	ニシキウズ	○	○	○	○	42	ヤクシマダカラ	○	○	○	○
9	ムラサキウズ	○	○	○		43	ホシダカラ	○	○	○	○
10	ギンタカハマ	○	○	○	○		※タマガイ科				
11	ベニシリダカ					44	ホウシュノタマ	○	○	○	
12	サラサバテイ	○	○	○	○	45	トミガイ			○	
	※リュウテン科					46	ヘソアキトミガイ				
13	コシタカサザエ	○				47	リスガイ	○		○	
14	カンギク	○		○	○	48	ウチヤマタマツバキ				
15	オオウラウズ				○		※フジツガイ科				
16	チョウセンサザエ	○	○	○	○	49	シオボラ	○		○	
17	ヤコウガイ	○	○	○	○	50	ホラガイ	○	○	○	○
	※アマオブネ科						※スイシヨウガイ科				
18	イシダミアマオブネ	○	○	○		51	ムカシタモト			○	○
19	ヒメイシダミアマオブネ					52	マギキガイ	○	○	○	○
20	コシタカアマガイ					53	スイシヨウガイ				○
21	キバアマガイ	○		○		54	アツソデ				
22	フトスジアマガイ					55	スイジガイ	○	○	○	○
23	アマオブネ	○	○		○	56	クモガイ	○	○	○	○
24	リュウキュウアマガイ			○		57	ラクダガイ			○	○
25	オオマルアマオブネ				○		※オキニシ科				
26	イシマキガイ			○		58	オキニシ	○	○	○	○
27	カノコガイ			○			※アキガイ科				
	※ムカデガイ科					59	レイシダマシ	○			
28	リュウキュウヘビガイ	○		○	○	60	アカイガレイシ				○
	※ゴマフニナ科					61	テツレイシ			○	○
29	ゴマフニナ			○		62	フノテツレイシ			○	○
	※ウミニナ科					63	シラクモガイ	○	○	○	○
30	ウミニナ			○		64	フノレイシ	○	○	○	○
31	ヘナタリ			○		65	ガンゼキボラ	○	○	○	○
32	イトカケヘナタリ			○		66	テツボラ				○
	※オニツノガイ科					67	ホソスジテツボラ			○	
33	ハシナガツノブエ		○	○			※ヤツシロガイ科				
34	カヤノミカニモリ	○	○	○		68	ウズラガイ	○	○	○	○
35	オニツノガイ	○	○		○	69	スクミウズラ				
36	コオニノノ			○	○						

番号	和名 (又は科名)	金久Ⅰ	金久Ⅱ	ケジ	泉川	番号	和名 (又は科名)	金久Ⅰ	金久Ⅱ	ケジ	泉川	
	※オニコブシ科						陸産					
70	オニコブシ	○		○			※ヤマタニシ科					
71	オニコブシ	○		○	○	98	オオシマヤマタニシ	○	○	○		
	※イトマキボラ科						※ナンバンマイマイ科					
72	フトウネナガニシ					99	オオシママイマイ			○	○	
73	ツノキガイ	○			○		※オナジマイマイ科					
74	リュウキュウツノマタ	○				100	オキナワウスカワマイマイ	○	○	○	○	
75	チトセボラ		○		○		二枚貝					
76	イトマキボラ	○	○	○	○		※フネガイ科					
	※エソバイ科						101	エガイ	○	○	○	○
77	シマベッコウバイ		○	○		102	ベニエガイ	○			○	
	※オリイレヨフバイ科						103	カリガネエガイ				
78	アツムシロ					104	リュウキュウサルボウ	○	○	○	○	
79	ヒメヨフバイ						※イガイ科					
80	ヨフバイモドキ			○		105	ヒバリガイ	○	○		○	
81	ヒメキリイレヨフバイ			○			※シュモクアオリ科					
	※フデガイ科						106	マクガイ		○	○	
82	イモフデ						※ウミギク科					
	※イモガイ科						107	ミヒカリメンガイ	○	○		○
83	サヤガタイモ		○	○	○		※イタボガキ科					
84	イボシマイモ	○		○	○	108	オハグロガキ			○	○	
85	マダライモ	○	○	○	○		※ツキガイ科					
86	アジロイモ					109	ツキガイ			○	○	
87	ヤナギシボリイモ	○	○	○	○	110	ヒメツキガイ					
88	ハナイモ		○				※キクザル科					
89	カバミナシ					111	ケイトウガイ	○	○			
90	アンボンクロザメ			○			※シャコガイ科					
91	クラフモドキ	○	○		○	112	シラナミ	○	○		○	
	※ブドウガイ科						113	ヒレジャコ	○	○	○	
92	カイコガイ			○			※ザルガイ科					
	※カラマツガイ科						114	カワラガイ	○		○	
93	コウダカカラマツ	○	○	○	○		※マルスダレ科					
	※アサガオガイ科						115	ヒメアサリ			○	
94	アサガオガイ					116	ホソスジイナミガイ	○	○	○	○	
	※アメフラシ科						117	アラスジケマンガイ	○	○	○	○
95	タツナミガイ				○	118	スダレハマグリ			○		
	※コウイカ科						119	リュウキュウアサリ				
96	コブシメ					120	スノメガイ	○		○	○	
	淡水産						※チドリマスオ科					
	※トウガタカワニナ科					121	イソハマグリ	○	○	○	○	
97	トウガタカワニナ	○		○		122	ナミノコマスオ			○	○	

番号	和名 (又は科名)	金久Ⅰ	金久Ⅱ	ケジ	泉川	番号	和名 (又は科名)	金久Ⅰ	金久Ⅱ	ケジ	泉川
123	※バカガイ科 リュウキュウバカガイ	○	○		○	126	※シオサザナミ科 マスオガイ		○		
124	※ニッコウガイ科 リュウキュウシラトリ			○	○	127	リュウキュウマスオ	○	○	○	○
125	※アサジガイ科 サメザラモドキ						淡水産				
						128	※シジミ科 マンブローブシジミ		○	○	○



長浜金久第Ⅱ遺跡出土の自然遺物

— とくに動物遺体について —

西中川 駿 (鹿児島大学農学部助教授)

古代遺跡から出土する自然遺物は、土器などの人工遺物と共に、当時の人々の生活を知る上に、貴重な資料を提供している。長浜金久遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町長尾長浜金久にあり、新奄美空港建設に伴い、昭和57年から第一次、二次の発掘調査が行われ、それらの遺物については、すでに報告されている。今回、調査の依頼を受けた長浜金久第Ⅱ遺跡の自然遺物は、昭和58年調査の隣接地で、鹿児島県文化課の井上氏の指導の下で、昭和62年4月～5月に発掘されたものであり、V層の包含層、すなわち縄文後期の人工遺物と共に出土している。ここでは自然遺物、とくに当時の人々の残滓である動物遺体について、その概要を報告する。

長浜金久第Ⅱ遺跡から出土した自然遺物は、表1に示す通り、総重量1246.2g(貝類を除く、貝類は239.746kg)で、そのうち哺乳類が98.9g、爬虫類106.1g、魚類133.7g、甲殻類109.0gおよびウニ類776.7gである。

哺乳類は、イノシシのみで、犬歯、上腕骨、尺骨、踵骨など43個の骨片の出土がみられ(図Ⅰの1～8)、中には焼かれたものもあり、少なくとも2個体以上のものである。上腕骨の骨体最小幅×径は、14.6×19.6mmで、これは現生のリュウキュウイノシシと似た大きさであり、また、形状もよく似ている。爬虫類は、ウミガメの頭蓋、腹甲、縁甲など58骨片の出土がみられ(図Ⅰの9、10)、それらはB-2区で最も多い。魚類は、ブダイ、クロダイ、ハリセンボンおよびハタ科の前上顎骨、下咽頭骨、椎骨など81個の骨片が検出され(図Ⅰの13～18)、他の動物に比べて多い出土である。甲殻類は、大型、小型の鋳脚77個が検出され、(図Ⅰの11、12)これらはノコギリカザミなどのものと思われる。ウニ類は、種不明であるが、ナガウニのものと思われる殻板1019個の破片がみられ、(図Ⅰの19～21)、これらは本遺跡出土の自然遺物の中で、貝類につく量である。

次に出土遺物を区画別にみると(表1参照)、B-2区が最も多く、次いでB-1、A-1、2の順である。

以上、長浜金久第Ⅱ遺跡の出土自然遺物について述べたが、本遺跡の特徴は、陸棲の動物より、海棲の動物が多くみられたことである。これは当時の奄美地方には、哺乳類の生息が少なく、人々は海に出て、貝、魚、カニ、ウニなどを採集して、動物蛋白源としていたことが想像される。一方、これまでの調査で、奄美の遺跡からは、イノシシ、イヌ、アマミノクロウサギ、ジュゴン、クジラなどが検出されているが、¹⁾本遺跡からは、イノシシのみであった。また、シカの出土骨は、奄美では検出されていない。これは当時の人々がシカを食料としていなかったのではなく、現在もシカは生息していないことから、当時は生息していなかったことが考えられる。

参考文献

1. 伊仙町教育委員会：犬田布貝塚，P74—81，1984
2. 鹿児島県教育委員会：長浜金久遺跡，P223—229，1985
3. 笠利町教育委員会：宇宙貝塚，P95—96，1978
4. 笠利町教育委員会：あやまる第2貝塚，P62—65，1984
5. 西中川 駿：薩南及び南西諸島の縄文、弥生遺跡出土の自然遺物，鹿児島古2，102—112，1984

表1. 長浜金久第Ⅱ遺跡出土の動物別・区画別出土骨量

(g)

区画	哺乳類	カメ類	魚類	カニ類	ウニ類	不明骨	区画別出土量
A-1	17.8(6)	6.6(2)	3.3(5)	26.9(6)	129.0(124)	3.0(6)	186.6(159)
A-2	29.3(8)	13.1(4)	18.3(2)	12.9(0)	71.0(102)	3.8(4)	148.4(140)
A-3	6.7(1)	4.0(2)	4.0(4)				14.7(7)
B-1	9.8(2)	26.2(4)	45.9(2)	11.2(8)	122.0(157)	12.0(8)	227.1(220)
B-2	33.3(3)	42.0(4)	47.2(3)	54.2(3)	310.0(415)	3.0(7)	489.7(540)
B-3		7.0(2)	7.5(7)	1.3(2)	86.0(120)		101.8(131)
C-1					1.5(2)		1.5(2)
C-2		3.2(3)			5.0(4)		8.2(7)
C-3					0.2(1)		0.2(1)
カードなし	2.0(1)	4.0(2)	7.5(2)	2.5(2)	52.0(94)		68.0(101)
動物別出土量	98.9(3)	106.1(6)	133.7(8)	109.0(7)	776.7(1019)	21.8(2)	1246.2(1308)

() は骨片、殻片の数。不明は細骨片のため同定不能。



図版の説明

1—8：イノシシ 9, 10：ウミガメ 11, 12：カニ 13—15：ブダイ 16：ハリセンボン
17：クロダイ 18：ペラ科 19—21：ウニ

1. 犬歯(右下顎) 2. 犬歯(右下顎) 3. 上腕骨(右) 4. 尺骨(左) 5. 膝骨(右) 6. 踵骨(左)
7. 踵骨(右) 8. 基節骨(右, 第三指) 9. 頸蓋片 10. 緑甲 11. 鉗脚 12. 鉗脚 13. 下咽頭骨
14. 前上顎骨(右) 15. 歯骨(右) 16. 上顎骨 17. 前上顎骨(左) 18. 下咽頭骨 19—21. 殻板片

液体シンチレーション ^{14}C 年代測定結果報告書

京都産業大学 理学部 山田 治

先般よりご依頼の ^{14}C 年代測定の結果を下記のとおりお知らせ申し上げます。

測定番号	試料名・採取地	^{14}C 年代測定値
KSU-1572	長浜金久第Ⅱ遺跡 貝	2190 \pm 50BP

(註) ^{14}C 年代測定値の表現法は、次のごとき国際的約束に基づいています。

- (1) ^{14}C の半減期は5568年として計算します。
- (2) BPは Before Presentの略です。ただし、Presentは1950年に固定し、それから何年前かを示します。
- (3) 測定誤差は、1標準偏差を用います。(真の値が1標準偏差の中にはいる確率は約68%です。)
- (4) 測定値には必ず測定機関記号と測定番号をつけます。索引やデータの確認に必要ですから、引用の際には必ずこの記号と番号をつけておいて下さい。
- (5) ^{14}C 年代測定値は世界共通です。そのため、 ^{14}C 濃度の基準に世界共通の物質を使用しています。その物質名は、アメリカ国立標準局から販売されているシュウ酸(通称NBSシュウ酸)です。

圖 版



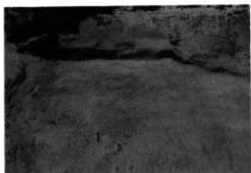
遺跡遠景



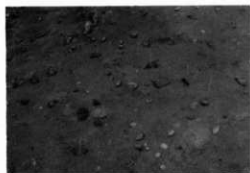
調査風景



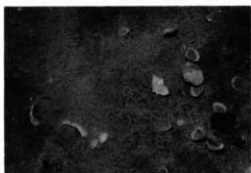
土層断面



土層断面



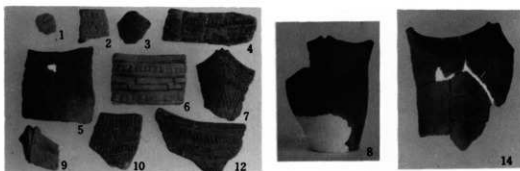
出土状況



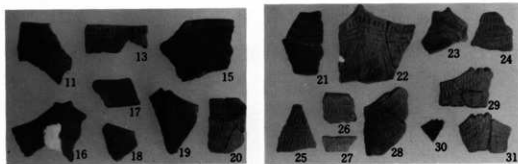
出土状況



遺物出土状況

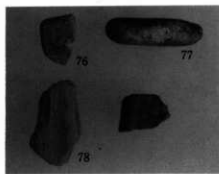
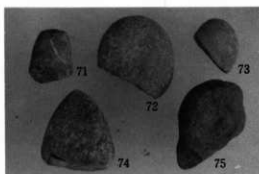
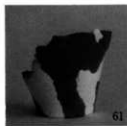
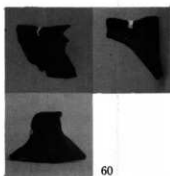
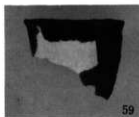
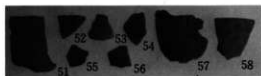
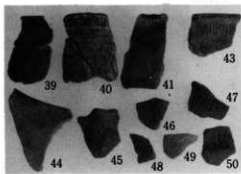
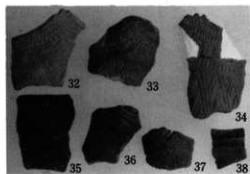


出土遺物(土器)

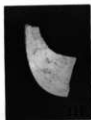
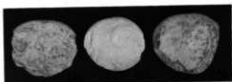
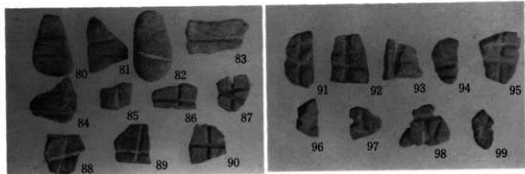


出土遺物(土器)

圖版 3



出土遺物(土器, 石器)



出土遺物(石器, 貝製品, 骨角器)

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書06
新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長浜金久第Ⅱ遺跡

発行日 昭和63年3月
発行 鹿児島県教育委員会
鹿児島市山下町14-50
印刷 中央印刷株式会社
鹿児島市春日町12-16